

御 岳 田 遺 跡 7

宅地造成工事に伴う弥生・古墳時代の発掘調査報告書

2017

甲斐市教育委員会

甲斐市文化財調査報告 第26集
(山 梨 県)

御 岳 田 遺 跡 7

宅地造成工事に伴う弥生・古墳時代の発掘調査報告書

2017

甲斐市教育委員会

序 文

甲斐市は、平成27年に行われた国勢調査の結果、山梨県で唯一人口が増加しているまちです。増加の要因として考えられることは、県都甲府に隣接し、交通の利便性の良いことがあげられるでしょう。そのため、開発によって生じる埋蔵文化財包蔵地の問い合わせも増加の一途をたどっております。

現在、市内には220箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていますが、とくに市中央部の茅ヶ岳南麓や市東部の荒川扇状地に集中しています。この中には居住域、墓域がセットで発見された弥生時代の「金の尾遺跡」や、山梨県最古の登窯跡である「天狗沢瓦窯跡」など、重要な遺跡が点在しています。これらのことから、山梨県の歴史を学習する上でも注目される地域となっています。

今回報告します「御岳田遺跡」の発掘調査は、甲斐市大下条地内の宅地造成工事に伴い行われました。調査の結果、御岳田遺跡では初めて弥生時代の住居跡が見つかり、新たな知見を得ることができました。

先にも述べましたとおり、近年甲斐市では頻繁に開発が行われるようになり、埋蔵文化財の保護が急務となってきております。今後は調査で得られました成果を後世に伝えていくとともに、学校教育や歴史研究、生涯学習の資として多くの方々に幅広く活用していただければ幸いです。

最後に、工事主体者である株式会社東京セキスイハイムの文化財保護に対する深いご理解のもと、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に感謝申し上げます。

平成29年 3 月


甲斐市教育委員会

教育長 西山 豊

例 言

1. 本書は、山梨県甲斐市大下条に所在する御岳田遺跡第7次発掘調査報告書である。
2. 本書は、東京セキスイハイム株式会社による宅地造成工事に伴い実施された。調査面積は造成工事内の公道建設予定地109.56㎡である。調査費用負担は東京セキスイハイム株式会社による。
3. 発掘調査及び整理分析調査期間
試掘調査 平成27年11月9日
発掘調査 平成28年4月15日～平成28年5月20日
整理分析調査 平成28年6月1日～平成29年2月28日
4. 調査組織は次のとおりである。
調査主体者 甲斐市教育委員会
調査担当者 長谷川 哲也（甲斐市教育委員会）
調査事務局 甲斐市教育委員会 教育部 生涯学習文化課 文化財係
発掘・整理分析調査協力員（敬称略・五十音順）
青柳 正史、秋山 高之助、伊井 実、小林 求、齊藤 功記、菅沼 芳治、醍醐 三郎、高添 美智子、立花 重光、田中 ひとみ、堤 吉彦、手塚 松雄、羽中田 勲、日向 充雄、深澤 友子、古屋 秀雄、森沢 篤美、望月 典子、横内 博（敬称略・五十音順）
5. 本書は長谷川が執筆した。
6. 報告書作成にあたり、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略）
坂本 美夫、新津 健、中込 司郎、鈴木 麻里子、畑 大介（以上、甲斐市文化財保護審議委員）、小林 健二（山梨県立考古博物館）
8. 本書の編集及び遺構、遺物の写真撮影は長谷川が行った。
9. 御岳田遺跡第7次発掘調査において得られたすべての資料は、一括して甲斐市教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 座標は世界測地系に準拠した。また、標高は東京湾平均海水面水準である。
2. 遺構堆積土及び土器の色調は、農林水産省農林技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』に準拠している。
3. 遺物挿図中、断面白抜きは弥生土器・土師器、土器内外面のは赤彩を表示している。
4. 各挿図の縮尺は、遺構1/40、土器1/3、石器・石製品1/2を原則とし、それぞれにスケールを付した。
5. セクション図、エレベーション図内の標高の単位（m）は省略している。
6. 出土遺物観察表の計測値欄中、（ ）内数値は推定を表し、残部の計測は数字の頭に「残」と記した。
7. 遺構平面図中の数字と黒点は、遺物挿図番号と出土位置を表す。
8. 遺物番号は本文、挿図、観察表で統一してある。
9. 本書で使用した地図は、甲斐市都市計画地図である。

本 文 目 次

序文	
例言・凡例	
目次	
第1章 調査の概要	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	5
第3章 遺構と遺物	
第1節 基本層序	9
第2節 遺構と遺物	10
第4章 まとめ	14

挿 図 目 次

第1図	甲斐市の位置	2	第8図	2号住居跡炉		
第2図	御岳田遺跡と周辺の遺跡	3		3号土坑・Pit 1	1～3号溝	18
第3図	調査区位置図	4	第9図	4・5・7～9号溝	Pit 8	19
第4図	調査区全体図	8	第10図	6号溝	10～11号溝	20
第5図	基本層序	9	第11図	1～2号土坑		21
第6図	1号住居跡	16	第12図	出土遺物 1		22
第7図	2号住居跡 Pit 2～5	17	第13図	出土遺物 2		23

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	24	第2表	土坑観察表	24	第3表	ピット観察表	24
-----	---------	----	-----	-------	----	-----	--------	----

写 真 目 次

写真1	試掘調査の様子	1	写真3	土器洗浄作業	2
写真2	本調査 人力による表土除去の様子	1	写真4	出土品実測作業	2

写 真 図 版 目 次

図版1	調査前風景(東から)	図版6	7号溝 完掘(南から)
	調査区全景(西から)		8号溝 完掘(南から)
図版2	調査区全景(西から)		6号溝ピット群 検出状況(東から)
	調査区西側 調査風景		6号溝 ピット群検出状況(南から)
	調査区東側 調査風景		6号溝 ピット断面図(調査区西壁)
図版3	1号住居跡 完掘(南から)	図版7	6号溝 完掘(西から)
	1号住居跡 完掘(東から)		(東から)
図版4	2号住居跡(南から)		1号土坑 完掘(北から)
	2号住居跡 完掘(東から)		2号土坑 完掘(東から)
図版5	2号住居跡炉 検出状況(東から)		3号土坑(2号住居跡内) 完掘(南から)
	2号住居跡炉 完掘(東から)		3号土坑(2号住居跡内) 遺物出土状況(南から)
	2号住居跡 遺物出土状況(北から)	図版8	出土遺物 1(1～7)
	1号溝 完掘(南から)	図版9	出土遺物 2(8～17)
	2号溝 完掘(南から)		
	3号溝 完掘(南から)		
	9・4・5号溝 完掘(西から)		

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

現在の甲斐市域の過去約30年間の人口増加率をみると、昭和50年の34,986人に対し、平成29年2月現在の人口は75,191人である。この30年間で人口は2倍以上の増加となっている。また、平成に入ってから人口増加のペースはゆるやかになっているものの、平成17年当時の人口74,062人に比べ、現在の人口は約1,000人の増加となっている。このように、ゆるやかに人口が増加している甲斐市では、周知の埋蔵文化財包蔵地・包蔵地外にかかわらず、水田や畑地として利用している、あるいは利用していた土地が宅地造成などの開発対象となっている。旧敷島町域や旧竜王町域の開発もさることながら、近年では旧双葉町域、とくに赤坂台地上での開発も目立っている。

そのため、開発前の包蔵地確認の問い合わせ件数も、平成22年度の777件に対し、平成24年度978件、平成27年度980件と、年度ごとに多少の増減はあるものの、全体的には増加傾向にある。また、文化財保護法第93条・94条に基づく届出件数は、平成22年度100件、平成24年度91件、平成27年度99件と、包蔵地確認の問い合わせ件数と同様に多少の増減はあるが、どの年度も年間100件程度の届出が提出されている。そのうち、平成27年度は試掘調査が13件、工事立会が81件、慎重工事が5件であった。とくに宅地造成をするにあたり、恒久的建造物である道路を造成することから、必然的に試掘調査の件数も微増しており、このことは本調査の増加にもつながっている。

本報告も、宅地造成に伴う本調査が行われたものである。平成27年10月2日付で、土地所有者から文化財保護法第93条第1項に基づく届出が甲斐市教育委員会に提出された。この届出に対して、同年10月9日付で甲斐市教育委員会教育長から山梨県教育委員会教育長に宛て、試掘調査が必要である旨の意見書を添えて進達し、同年10月14日付・教学文第2225号で山梨県教育委員会教育長から試掘調査の指示通知が申請者になされた。これをうけて、同年11月9日～11月16日かけて甲斐市教育委員会によって試掘調査が行われた。開発予定区域内の恒久的建造物（道路）予定部分に2本のトレンチ（1.5m×11m）を設定し調査を行ったところ、すべてのトレンチで遺構・遺物が確認された。とくに東側のトレンチからは、住居跡の硬化面が確認されると共に、付近から多量の土器が出土した。これら多量の土器はとりあげず、土器の上に土のう袋を設置して保護をし、なおかつ本調査になった場合のことを考慮し、遺構や遺物が出土した付近に山砂を散布して目印とし、トレンチを埋め戻した。

試掘調査の結果を、土地所有者に対して本調査が必要であることを回答したところ、同年12月11日に発掘調査の依頼が甲斐市教育委員会教育長宛に提出され、同年12月14日に収受した。



写真1 試掘調査の様子



写真2 本調査 人力による表土除去の様子

2. 調査の方法と経過

年度が切り替わった平成28年4月に入り、開発業者である東京セキスイハイム株式会社山梨支店と甲斐市教育委員会との間で埋蔵文化財調査委託協定書を結んだ。本調査は同年4月15日から始まった。前年度に試掘調査を行った恒久的建造物（道路）部分全体の表土を重機によって除去した。表土直下には包含層が堆積しているため、包含層以下は人力で掘削を行った。遺構のセクション図・エレベーション図・出土遺物の平面図は手実測で行い、遺構測量と遺物の取り上げは疾測量株式会社に委託した。雨天による調査中止等もあったが、発掘調査は同年5月20日まで行われた。

3. 整理・分析作業の経過

発掘調査が終了した直後の、平成28年5月23日から整理・分析作業を開始した。これらの作業は主に文化財整理室で行った。実測図のトレースは製図ペンで行い、版下を作成した。それらと並行し、発掘調査現場での情報をもとに遺構の図面や出土遺物の検討を行い、本報告を記述した。これら一連の作業を終え、平成29年3月31日に報告書の刊行となった。



写真3 土器洗浄作業



写真4 出土品実測作業

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

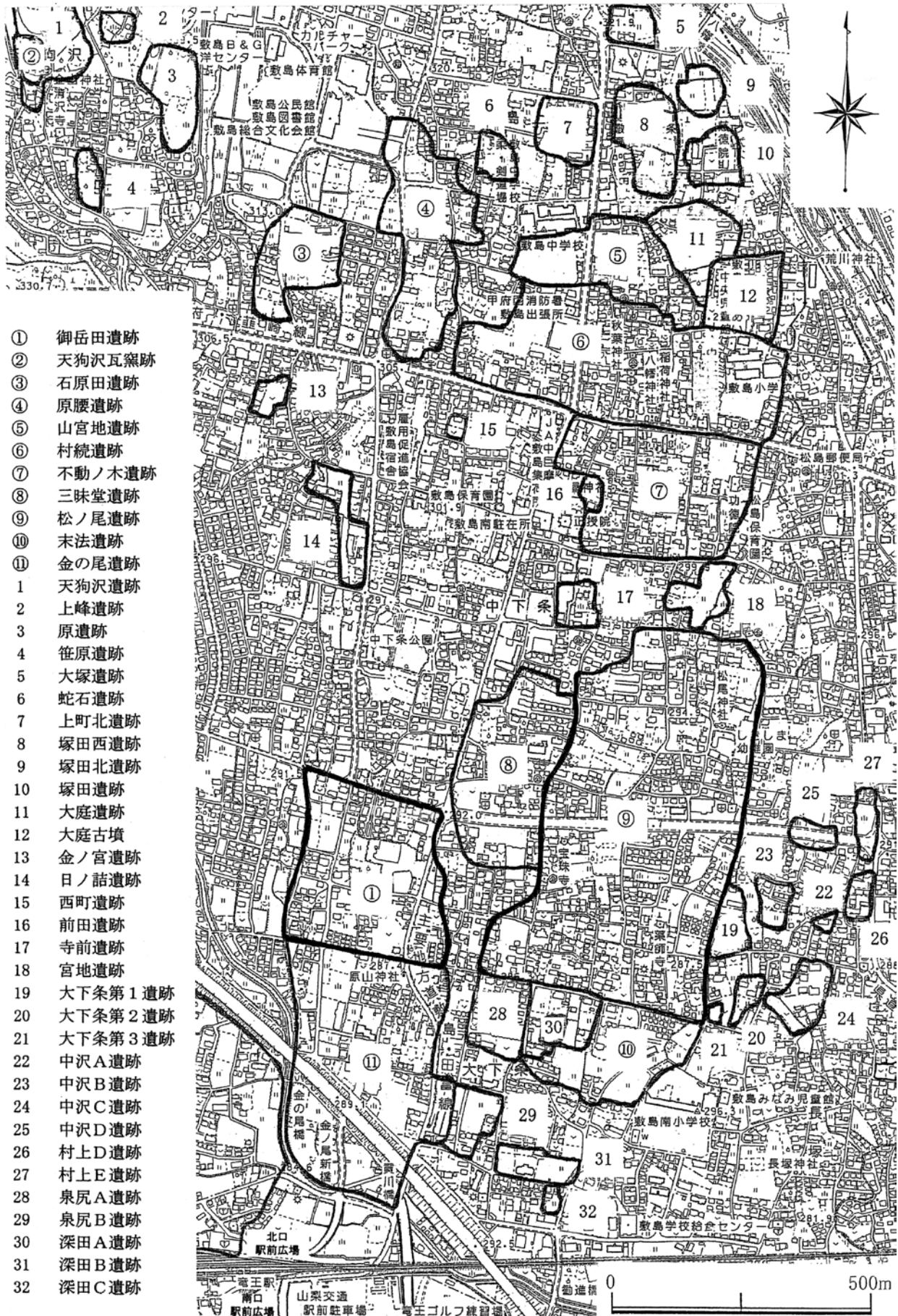
1. 甲斐市の地理

本市は甲府盆地の北西側に位置し、甲府市、昭和町、韮崎市、南アルプス市、北杜市に接している。平成16年9月1日に双葉町・敷島町・竜王町の3町が合併して甲斐市となり、現在の市域を構築している。面積は71.94km²、人口は平成29年2月末現在およそ7万5千人である。

市域は標高千数百mの山岳地から、丘陵、扇状地などバラエティに富んだ地形である。市域はおおよそ4つのエリアに分類することができる。市の北部は茅ヶ岳（1704m）や曲岳（1642m）、太刀岡山（1259m）、黒富士（1633m）など、標高千数百mを超える山々が点在する「山岳エリア」。

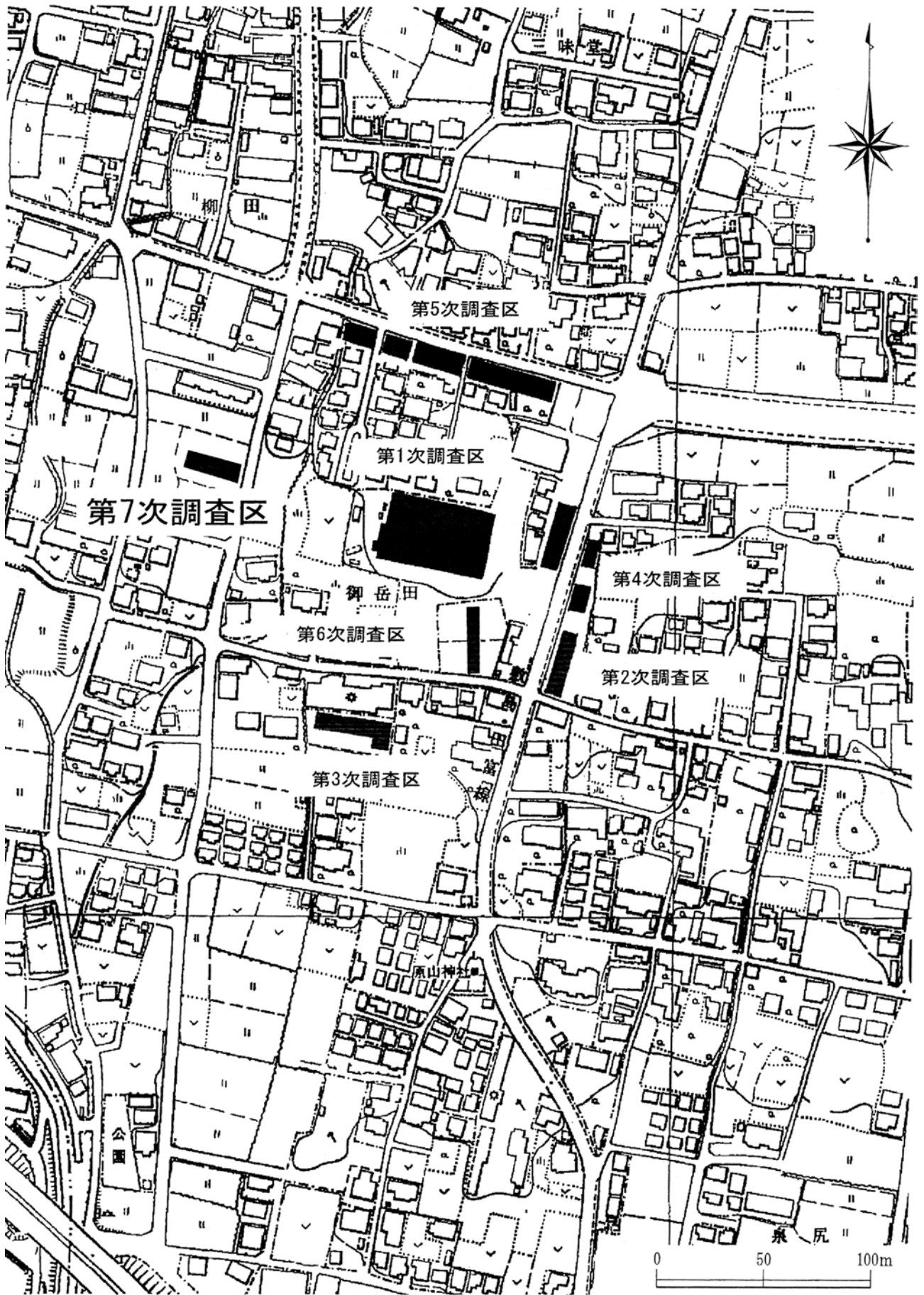


第1図 甲斐市の位置



- ① 御岳田遺跡
- ② 天狗沢瓦窯跡
- ③ 石原田遺跡
- ④ 原腰遺跡
- ⑤ 山宮地遺跡
- ⑥ 村統遺跡
- ⑦ 不動ノ木遺跡
- ⑧ 三味堂遺跡
- ⑨ 松ノ尾遺跡
- ⑩ 未法遺跡
- ⑪ 金の尾遺跡
- 1 天狗沢遺跡
- 2 上峰遺跡
- 3 原遺跡
- 4 笹原遺跡
- 5 大塚遺跡
- 6 蛇石遺跡
- 7 上町北遺跡
- 8 塚田西遺跡
- 9 塚田北遺跡
- 10 塚田遺跡
- 11 大庭遺跡
- 12 大庭古墳
- 13 金ノ宮遺跡
- 14 日ノ詰遺跡
- 15 西町遺跡
- 16 前田遺跡
- 17 寺前遺跡
- 18 宮地遺跡
- 19 大下条第1遺跡
- 20 大下条第2遺跡
- 21 大下条第3遺跡
- 22 中沢A遺跡
- 23 中沢B遺跡
- 24 中沢C遺跡
- 25 中沢D遺跡
- 26 村上D遺跡
- 27 村上E遺跡
- 28 泉尻A遺跡
- 29 泉尻B遺跡
- 30 深田A遺跡
- 31 深田B遺跡
- 32 深田C遺跡

第2図 御岳田遺跡と周辺の遺跡



第3図 調査区位置図

地質は主に凝灰岩や凝灰角礫岩で構成されており、南流する亀沢川によって急峻な段丘崖を構築している。また、荒川の上流である国特別名勝御岳昇仙峡付近は花崗岩で構成されている。市の中央部分は茅ヶ岳の火山活動によって形成された台地が広がる茅ヶ岳南麓の「丘陵エリア」で、赤坂の地名にもみられるとおり、褐色で粘性が非常に強い火山灰層が広がる。市の南部は南アルプス鋸岳を源流とする釜無川（富士川）によって形成された「扇状地エリア」で、北西から南東にかけてゆるやかに傾斜する扇状地である。市の東部は、甲府市との境を流れる奥秩父山系の金峰山を源とする荒川によって形成された「荒川扇状地エリア」で、かつて大部分は水田として利用されていた。扇状地の西縁は荒川と貢川によって形成された段丘崖で、この段丘上に天狗沢瓦窯跡（山梨県指定史跡）が立地している。

2. 遺跡の立地

御岳田遺跡は市域の東部に立地し、甲府市との境界を流れる荒川と、茅ヶ岳火山によって形成された通称「赤坂（登美）台地」との間に位置し、標高は約295mを測る。この台地と荒川の間には、南北に延びる2本の微高地があり、本遺跡は西側の微高地上に営まれていた集落遺跡であることが、これまでの調査で明らかになっている。また、御岳田遺跡の南には、山梨県下でも著名な縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である金の尾遺跡が隣接しており、字で遺跡を分けてはいるが、互いに関連しあう遺跡であると思われる。さらに詳細に立地場所をとらえると、両遺跡の西側から南側にかけて貢川が南流しており、御岳田遺跡・金の尾遺跡とも貢川左岸の自然堤防上に立地していることがうかがえる。

さて「御岳田」の名は、慶長6年(1601)の検地帳に記載されている「村西」「なかさと西」を併せた地名で、御岳塚という小さな塚が田圃の中にあったことに由来するとされる(『中巨摩郡地名誌』)。平成5年(1993)に行われた第1次調査では、花崗岩質の礫を約70cmの高さまで墳丘状に積み上げた塚が検出されており、前述の御岳塚との関連も考えられる。また、「御岳」とは金峰山金櫻神社（甲府市御岳町）のことをさし、本遺跡の東側にある大下条集落の東縁辺を、南北に御嶽道^{みたけみち}が走っていることも「御岳田」の由来になっているのであろう。

遺跡名が示すとおり、本遺跡周辺はかつて田圃して土地利用されており、田圃や水にかかわる小字がいくつかある。「餅田」「柳田」「中更^{なかふき}（フケが転じたものか）」や、金の尾遺跡の東側には「深田」「泉尻」が、現在でも確認できる小字である。戦後にアメリカ軍が撮影した空中写真で本遺跡周辺を確認すると、大下条の集落以外は田圃として土地利用されていることが一目瞭然であり、田圃や水に関する小字名がつけられていた理由がよくわかる。また、先の空中写真からは、今次調査区が小河川に挟まれている場所であることが看取できる。調査区の東には、「どんどん川（どんどん川）」と地元で呼称されている小河川が南流しており、調査区の西側は貢川に至るまでの間に2本の小河川が南流している。これらの小河川は、周辺の宅地化が進む中で暗渠が施されるなど現状確認が難しくなっているものの、住宅地等に残るわずかな高低差等によって、河川の痕跡を把握することができる。

これまで調査が行われてきた区域は荒川扇状地の西側微高地上に立地しているが、以上のことから今次調査区は西側微高地の西縁にある、小河川によって区切られた小規模な微高地に立地していることがわかる。

第2節 歴史的環境

1. 御岳田遺跡と周辺の遺跡

荒川扇状地の西側微高地上に立地する御岳田遺跡（①）の南には、県下でも著名な弥生時代後期の集

落遺跡である金の尾遺跡(⑪)がひろがる。先にも述べたが、金の尾遺跡も西側微高地に立地し、道路を挟んで本遺跡と隣接しているだけに、互いに関連しあう遺跡と思われる。この西側微高地は、金の尾遺跡で縄文時代中期の住居跡が確認されていることからもわかるとおり、縄文時代から人々が生活していたことが明らかになっている。この尾根を北に進むと、平成26年度の第1次調査で、平安時代の住居跡が確認された金ノ宮遺跡(13)がある。この遺跡の東西にも小河川が南流しており、やはり微高地上に立地している。縄文土器片や黒曜石の剥片・チップが多量に出土したことから、付近には縄文時代の集落も存在していたと思われるが、後世の土地利用によって削平されており、その実態は不明である。金ノ宮遺跡から北上すると、山梨県最古のミニチュア土器が出土した石原田遺跡(③)がひろがり、扇頂西側微高地上の遺跡はここで途切れることとなる。

続いて、東側微高地上の遺跡を概観する。主要地方道敷島・田富線のやや東側、埋没した谷をはさんだ東側微高地は、西側微高地よりも濃密に遺跡が分布する。また、東側微高地上には、金峰山金桜神社(甲府市御岳町)への登拝路である御嶽道が南北に貫入にしており、道沿いには石造物が多いことも特徴の一つである。

さて、扇頂には甲府盆地周辺部の古墳では北限に位置する大塚古墳が位置し、そこから南へ下ると、平成27年度の本調査で石室の基底部が発見された大庭遺跡(大庭古墳・11、12)が位置する。石室内からは、計23個の水晶製切子玉や等、古墳時代後期の良好な資料が得られ、甲府盆地北西部の当該期を研究する上で重要な調査となった。

東側微高地をさらに南下をすると、甲斐市立敷島中学校周辺に行き当たる。山宮地遺跡(⑤)は中世の土壙墓が多数検出され、仏具を含む銅製品類17点が一か所からまとまって出土している。隣接する村続遺跡(⑥)では、約300㎡の調査区から8世紀後半から12世紀代にかけての住居跡が37軒検出された。遺物は瓦や緑釉陶器、貿易陶磁器、銅製小仏像の台座が出土しており、周辺の同時代の集落遺跡とは出土遺物の様相が異なる特徴的な遺跡である。

主要地方道甲府韮崎線(通称:山の手通り、穂坂路)をこえた先にある不動ノ木遺跡(⑦)では、試掘調査での確認にとどまるが、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての焼失住居跡や、平安時代後期の土師器片などが出土している。不動ノ木遺跡をこえると松ノ尾遺跡(⑨)に行き当たる。この遺跡は南北700m、東西400mの広がりを持ち、西側微高地の南部のほとんどを占める遺跡で、住居跡から出土した銅造仏形坐像(県指定有形文化財)がつとに著名である。また、平成27年度の調査では、周溝墓の溝から残存高84.3cmの大型赤彩壺が出土した。東側微高地上の遺跡は、管玉が出土している末法遺跡(⑩)で貢川にぶつかり途切れることとなる。

東西の微高地上以外には、天狗沢瓦窯跡(②)があげられる。甲斐市域を見渡しても荒川扇状地エリアには遺跡が集中しており、加えて調査件数も多いことから、資料も豊富である。以上のことから、荒川扇状地エリアは、市域の歴史解明だけにとどまらず、甲斐国の歴史を研究する上でも注目すべき地域といえる。

2. 御岳田遺跡の概要

次に御岳田遺跡の概要について述べる。本遺跡は前節で記したとおり荒川扇状地の西側微高地に立地しており、現況の土地利用のほとんどは宅地として利用されている。遺跡の発見は平成に入ってからで、平成4年(1992)の大型店舗建設に伴う試掘調査によって遺跡の存在が明らかとなり、これまでに今次調査を含め7度にわたる本調査が実施されている。ここでは、これまでの調査で得られた資料をもとに、時代ごとに概観する。

縄文時代

これまでの調査において、当該期の遺構は確認されておらず、遺構外遺物として縄文土器片がわずかに出土している程度である。

弥生時代

今次調査（第7次）において、本遺跡で初めて確認された。詳細は後述するが、弥生時代後期の住居跡が2軒確認された。

古墳時代

豊富な資料が確認されている時代で、4世紀中頃～5世紀初頭の住居跡8軒、5世紀中頃の住居跡1軒が確認されている。特徴的な遺物として、第1次調査において遺構外から水晶の原石6点と共に丸玉未製品1点が出土し、第6次調査では1号溝跡から緑色凝灰岩製の管玉未製品が出土している。また、御岳田遺跡から南東に約500m、東側の微高地に立地する末法遺跡では2点、上下から孔が穿たれているものの、ずれて貫通していない管玉と珪化凝灰岩のチップがまとまって出土している。

これらの遺物が荒川右岸の微高地上の遺跡から出土したことによって、玉造り工房跡が荒川右岸の微高地を拠点として存在した可能性が現実味を帯びる結果となり、古墳時代前期の玉造りの実態を解明する上で重要な成果が得られたといえよう。ほかに、第6次調査では本遺跡で初めて周溝墓が検出されており、細長く狭い調査区ではあったが、様々な新発見があった調査であった。

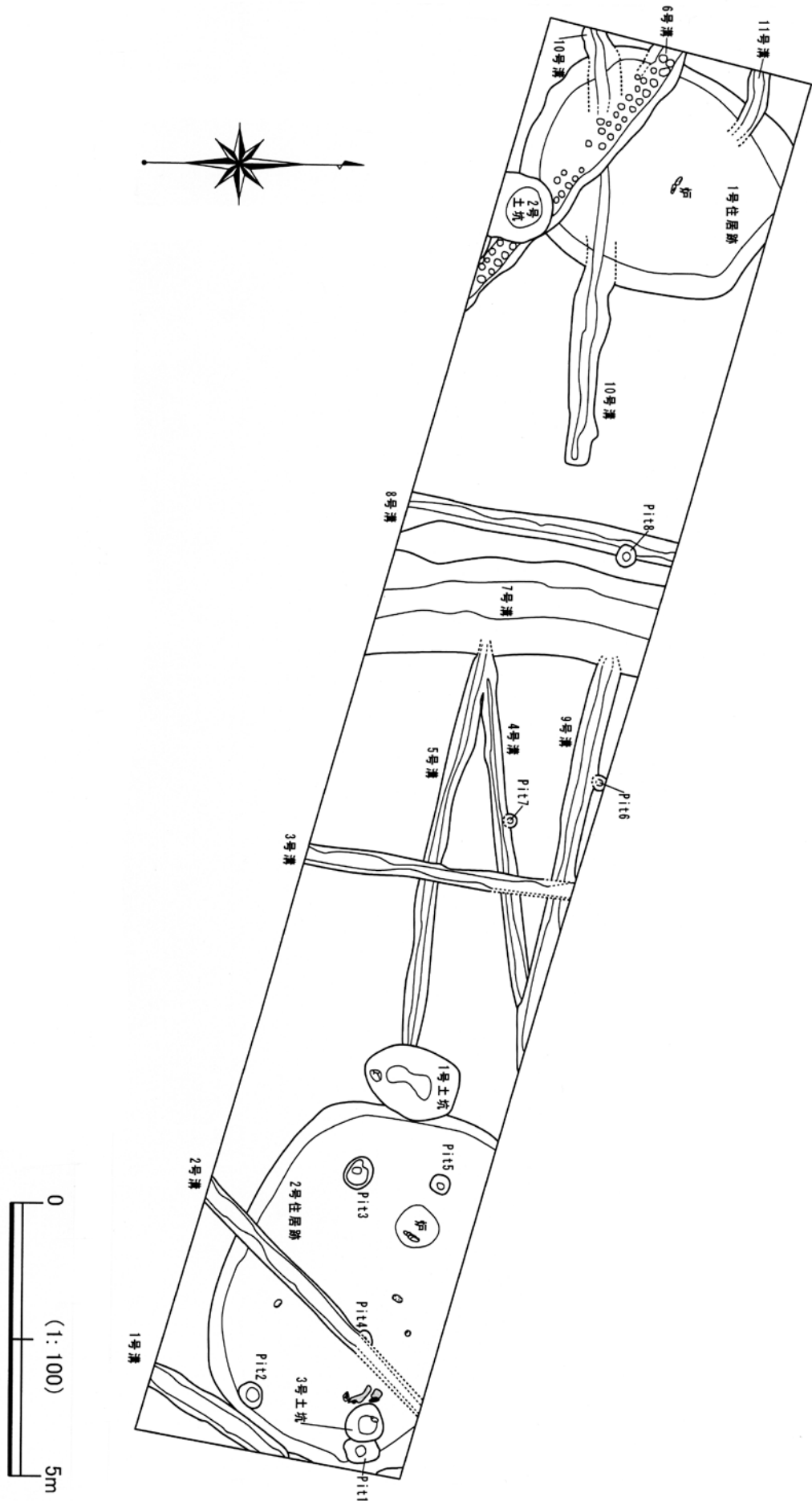
平安時代

古墳時代と共に豊富な資料が確認されている時代である。住居跡は25軒確認されており、中でも9世紀後半から10世紀前半にかけての住居跡が14軒、11世紀後半と、約半数を占める。第5次調査では、9世紀後半に位置付けられる3号住居跡から「伴」の墨書がある坏や、「有」の墨書がある皿などが出土し、調査区全体では墨書土器が合わせて17点出土している。

平安時代以降

六文銭を伴う15世紀後半の土壇墓が確認されている。

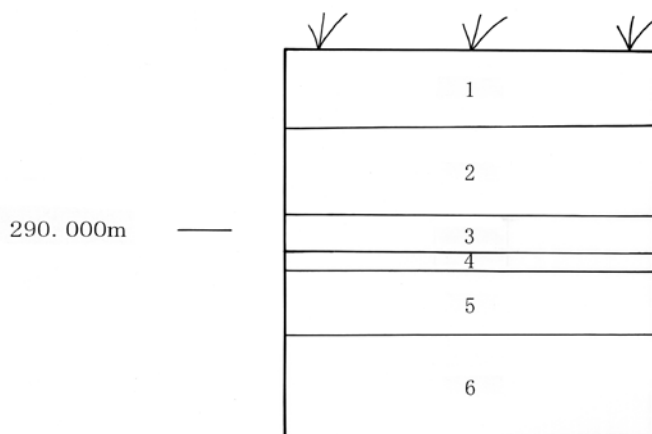
以上のように、御岳田遺跡は古墳時代と平安時代に関する調査成果が充実している遺跡である。



第4図 調査区全体図

第3章 遺構と遺物

第1節 基本層序



第5図 基本層序

第1層	表土（耕作土）	2.5Y 4/2	暗灰黄色	粘性非常に強い	しまり強い
第2層	床土	10YR 4/4	褐色	粘性あり	しまり非常に強い
第3層	旧耕作土	10YR 4/3	にぶい黄褐色	粘性あり	しまり非常に強い 1mm大の白色粒子を含む
第4層	旧床土	10YR 4/4	褐色	粘性あり	しまり非常に強い
第5層	黒褐色土層	10YR 2/3	黒褐色	粘性あり	しまり非常に強い 1mm大の白色粒子を含む
第6層	遺物包含層	10YR 2/2	黒褐色	粘性あり	しまり非常に強い 1mm大の白色粒子を含む 遺物多量を含む
地山		10YR 4/3	にぶい黄褐色	粘性あり	しまり強い 1mm大の白色粒子を多量に含む 遺構検出面

壁面はいずれも土層の堆積状況が良好に観察できたが、特に良好であった部分（7号溝から東に約1m進んだ南壁面）を図化したものである。第1層から第4層にも土師器小片などの遺物がわずかに含まれるが、耕作によるものと思われる。第5層から遺物の出土量が増加しはじめたものの、第6層の遺物含有量が圧倒的であるため、第6層を包含層と認識した。遺構確認面は第6層下の地山である。調査区全体では、おおよそ表土から40cmの深さで包含層を検出、60cmの深さで遺構が確認された。

第2節 遺構と遺物

今次調査で確認された遺構は、住居跡2軒、溝11条、土坑3基、ピット7基である。それぞれの遺構・遺物について以下に述べる。

住居（竪穴建物）跡

1号住居跡（遺構：第6図 遺物：第12図）

位置 調査区西端に位置し、6号溝・10号溝・11号溝、2号土坑に切られる。

形状・規模 形状はやや不整形な隅丸長方形を呈し、長軸約4.8m、短軸約4.2mである。覆土上層から中層にかけて拳大の円礫が数点出土し、中層以下から遺物の出土が顕著となった。炉は住居長軸方向からやや北よりに位置し、枕石と思われる細長い石が2つ置かれていた。床の土質はすべて砂質であったため、硬化面は確認できていない。壁は北西付近をのぞいて壁高約40cmを測る。

遺物 出土遺物は4点を図化した。1の折り返し口縁壺は住居覆土の検出面・上層・下層から、それぞれ破片で出土した。口縁部から肩部にかけての破片である。折り返し口縁で、口唇部には格子状の沈線文が施され、折り返し部には指頭痕と思われるくぼみがある。長さ約2cmの浮文が4条貼付されている。頸部には直径1.4cmの穿孔が2か所認められた。口縁部内面には、半円状の弧文が連続して施文されている。また、弧文を消すかのように敲打痕が認められる。肩部にはクシ状工具による羽状文が施文されている。2、3は底部破片。2は上層と下層からそれぞれ破片で出土した。焼成が甘かったためか、粘土紐の輪積み部分ですべて剥離していた。3は中層から出土した。4は上層から出土した打製石斧である。

遺構時期 弥生時代後期中葉

調査所見 炉付近に焼土は確認できず、また枕石にも熱を受けた痕跡が見られなかった。また、精査をしたものの柱穴も不明である。本住居跡の床や壁はポイントベースを打ち込む際、測量鉞の頭を金槌で一度軽くたたきただけで、すんなりと鉞が床に打ち込めるしまりであった。後述の2号住居跡と比べると、地山は細粒砂と中粒砂を多量に含んでいた。本住居跡を切る6号溝・10号溝・11号溝は、違いに覆土に大きな違いもみられず、出土遺物の時期差も大きくは離れていないため、住居廃絶後さほど期間をあげずに溝が掘られたと思われる。

2号住居跡（遺構：第7～8図 遺物：第12～13図）

位置 調査区東側に位置し、1号土坑に切られる。

形状・規模 住居北側は調査区外に及ぶものの、平面形は隅丸長方形を呈している。長軸約6.8m、短軸の検出部分で約4.1mである。推定ではあるが、短軸も5mは測るものと思われる。住居長軸方向からやや西よりに地床炉が確認できた。枕石は熱を受けた影響からか、何点かに割れていた。炉の範囲は円形の黒褐色土が堆積していたが、焼土は確認できなかった。その黒褐色土を取り除くと、深さ6cm前後の浅い掘り込みとなっていた。硬化面は床面全体で確認できたものの、前述の炉の浅い掘り込み範囲、3号土坑とPit1付近には見られなかった。床の硬化面は主に暗褐色土で構成され、地山のロームブロックが少量混じる。柱穴は3か所（Pit1～5）確認できた。Pit1～3が支柱穴であろう。また、3号土坑の西

隣で炭化物と焼土を確認した。

遺物 5は住居床面付近から破片で出土した壺である。6の片口付鉢は住居床面直上に伏せた状態で出土した（写真図版参照）。内外面に赤彩が施されている。7も片口付鉢である。住居内の3号土坑中層から出土した。こちらも臥位で出土し、内外面に赤彩が施されているが、6に比べると焼成も甘く、やや粗雑なつくりの印象を受ける。8のミニチュア土器は住居内の3号土坑下層から出土した。9は住居内、10、11の土師器は住居上層から出土した。

遺構時期 弥生時代後期後葉

調査所見 炉の浅い掘り込みの底には、枕石付近にわずかに直径1cm大の焼土が散っていたが、焼土範囲を示すまでの明確な火床面は不明である。また、掘り込み範囲の黒褐色土をフルイに二度かけたが植物種子などは確認できなかった。床の硬化面は黒褐色土が主であることと、柱穴付近は地山が見えていることから、床面の暗褐色土（10YR 2/3）は生活によって堆積したものと思われ、貼床を施した床ではないと判断した。硬化面は移植ゴテで簡単にはがすことができたが、床下の土坑などは確認できなかった。

溝跡

1号溝（遺構：第8図）

位置 調査区東端

形状・規模 検出部分2.7m、幅約50cm、深度約10cm

遺物 摩耗した土師器小片が出土

遺構時期 不明

調査所見 1号溝から3号溝は、基本土層の4層から5層で検出された。全体図では遺構の切り合い関係があるように表示されているが、実際はその他の遺構よりも上層で検出している。

2号溝（遺構：第8図）

位置 調査区東側

形状・規模 検出部分3.8m、幅約40cm、深度約10cm

遺物 時期を特定できる遺物なし

遺構時期 不明

3号溝（遺構：第8図）

位置 調査区中央

形状・規模 検出部分4.9m、幅約50cm、深度約10cm

遺物 摩耗した土師器小片が出土

遺構時期 不明

4号溝（遺構：第9図 遺物：第13図）

位置 調査区中央、5号溝と合流し、7号溝・9号溝とPit 7に切られる。

形状・規模 検出部分6m、幅約30cm、深度約20cm

遺物 高坏と思われる第13図-12が出土している。

遺構時期 古墳時代前期か
調査所見 近接する4号溝・5号溝・9号溝は、西に伸長した部分で7号溝に切られている。

5号溝（遺構：第9図）

位置 調査区中央、4号溝と合流し、1号土坑に切られる。
形状・規模 検出部分6m、幅約30cm、深度約25cm
遺物 検出面付近から古墳時代前期の土器片が出土
遺構時期 古墳時代前期か

6号溝（遺構：第10図 遺物：第13図）

位置 調査区西側、1号住居跡・10号溝を切り、2号土坑に切られる。
形状・規模 検出部分5.8m、幅約70cm、深度約
遺物 下層から13（鉢）が出土した。ほか、内外面に赤彩された土器小片、内面にハケ調整痕のある土器小片が出土した。

遺構時期 古墳時代前期

調査所見 検出時、1号住居跡を切っていることは目視できたが、覆土が住居跡とほとんど変わらないため、溝のラインが不明瞭であった。そのため、住居内の6号溝の南側の遺構プランは不明である。さらに、6号溝を切る2号土坑のプランも肉眼観察できなかった。

溝底から38基のピット群が確認された。各ピットは直径10cm程度で、東西に列をなしているように見える。ピットの間隔はそれぞれ異なるが、おおよそ10cm間隔である。覆土は各ピット同様であった。

7号溝（遺構：第9図 遺物：第13図）

位置 調査区中央、4号溝・5号溝・9号溝に切られる。
形状・規模 最長検出部分5m、最大幅約175cm、最大深度
遺物 検出面付近から摩耗が著しい14（高坏）が出土している。その他、台付甕の脚部破片などが出土した。全体的に弥生時代後期の土器小片が多いようである。

遺構時期 弥生時代後期

調査所見 覆土下層に部分的に砂礫層が確認されたほかは、ほぼ黒褐色土の堆積である。また、溝底は鉄分を含む硬質な砂礫層であった。

8号溝（遺構：第9図）

位置 調査区中央、Pit 8に切られる。
形状・規模 最長検出部分5m、最大幅約50cm、最大深度約25cm
遺物 土器片1点のみ
遺構時期 不明

9号溝（遺構：第9図）

位置 調査区中央、4号溝・7号溝を切り、Pit 8に切られる。
形状・規模 最長検出部分5m、最大幅約50cm、最大深度約25cm

遺物 時期を特定できる遺物なし

遺構時期 不明

10号溝（遺構：第10図）

位置 調査区西側、1号住居跡を切り、6号溝に切られる。

形状・規模 最長検出部分8m、最大幅約50cm、最大深度約25cm

遺物 土器小片のみ

遺構時期 不明（1号住居跡との新旧関係から弥生後期中葉以降と思われる）

調査所見 1号住居跡を切っているが、どちらも遺構覆土がほとんど変わらず、10号溝がどのようなラインで1号住居跡を切っているかは不明である。

11号溝（遺構：第10図）

位置 調査区西端、1号住居跡を切る。

形状・規模 検出部分1.2m、最大幅約40cm、最大深度約25cm

遺物 なし

遺構時期 不明（1号住居跡との新旧関係から弥生後期中葉以降と思われる）

土坑

1号土坑（遺構：第11図）

位置 調査区東側、2号住居跡、5号溝を切る

形状 楕円形

遺物 図化はしていないが、裏面にヨコナデ調整痕のある土器小片が出土した

遺構時期 不明（2号住居跡との新旧関係から弥生後期後葉以降と思われる）

2号土坑（遺構：第11図）

位置 調査区東側、2号住居跡、6号溝を切る

形状 隅丸方形か

遺物 13（鉢）の土器片の一部が出土しているほか、図化はしていないが、ハケ目を施す土器小片が出土した。

遺構時期 不明（1号住居跡や6号溝との新旧関係から弥生後期中葉以降と思われる）

3号土坑（遺構：第8図 遺物：第12～13図）

位置 調査区東側、2号住居跡内、Pit 1を切る

形状 円形

遺物 7（片口付鉢）が覆土中層から臥位で、8（ミニチュア土器）が覆土下層から出土している。

遺構時期 弥生時代後期末葉

調査所見 土坑の周辺では炭化物と焼土が確認された。住居内のほぼ全面で確認できた床の硬化面が、土坑周辺では確認できなかった。

第4章 まとめ

御岳田遺跡は、古墳時代・平安時代の調査成果が充実している遺跡である。そして、今次調査で弥生時代後期の遺構・遺物が確認されたことで、本遺跡と金の尾遺跡が立地する西側微高地は、弥生時代後期から集落が営まれていたことが明らかとなった（西側微高地についての詳細は第2章を参照していただきたい）。

今次調査は一括資料が少ないため、即断は避けるべきということは重々承知をしているが、数少ない資料から遺構の時期を検討してみることにする。以下に今次調査で発見された遺構と遺物について若干の所見を述べ、まとめとしたい。

住居跡について

1号住居跡出土の折り返し口縁壺（第12図-1）は、『山梨県史 資料編2 原始・古代2』（以下『県史』）での編年と照らし合わせると、おおよそ5B期（住吉式）に該当すると思われる。（棒状）浮文と櫛歯状工具による疑似縄文が共通し、円形浮文の代わりに頸部には穿孔がなされていることが特徴である。頸部のくびれも類似している。住居のプランについては、不整形な隅丸長方形と認識したが、柱穴が1基も確認できず、平面プランから時代を比定することは困難である。

次に2号住居跡であるが、壺（同5）、片口付鉢（同6、7）から時期を考えると、6A期（六科丘式）に該当するものと思われる。ただし、2号住居跡出土の壺はハケ調整を主としており、六科丘式のようにヘラ削りやヘラ磨きでなめらかな仕上がりとはなっていない。また、頸部のくびれは強いカーブを描くものの、頸部と肩部の境目にわずかな屈折を持つ。片口付鉢は、六科丘式と同時期とされる上の平遺跡（甲府市中道町）出土のもの比べると一回り小さい。これらのことから、壺と片口壺、双方の形状は六科丘式に属するが、詳細に時期を検討すると、多少の時期差があると思われる。また、住居プランは全面を調査できたわけではないが、隅丸長方形を呈していると思われる。『県史』では、隅丸長方形型の住居は5A期（金の尾式）、小判型住居は6A（六科丘式）に盛行するタイプであるとし、弥生後期中頃以降は隅丸長方形型と小判型の各型は混在するようになる。以上のことから、土器様相と住居のプランの時期は整合するとみて良いだろう。

その他の遺構について

他に特徴的な遺構として、溝底に径約10cmのピット群が38基検出された6号溝があげられる。2列に並んだこのピット群の詳細な性格は不明である。想像をたくましくすれば、大師東丹保遺跡Ⅰ区（南アルプス市大師）や向河原遺跡（同市江原）で検出された杭列の、杭が欠失した痕跡にも見える。他に類似例として、山梨学院川田運動場遺跡群（甲府市川田町）の第1次調査区で検出されたSD8、SD14などがあげられる。遺構の時期が本遺跡とは異なる部分もあるため、ただちに同様の遺構であると結論づけるのは尚早であるが、本遺跡のピット群も杭列の痕跡ではないかと思われる。ただし、木製品や木片等は出土していない。出土遺物も少量で、時期を特定するにはいささか心もとないが、下層から出土した鉢（第13図-13）をもとに、古墳時代前期の遺構とした。

今次調査で出土した遺物量は、コンテナ2箱分という少量であった。調査面積も約110㎡と広大ではないが、そのような中で弥生時代の遺構が見つかったことは、大きな成果となった。遺物が少量であったことは、包蔵地の縁辺部ということで、遺構・遺物が希薄になってきている地域であると考えたい。

本遺跡の所在する甲斐市大下条・中下条の旧敷島町南部地域は、交通の便も良いことから宅地造成工

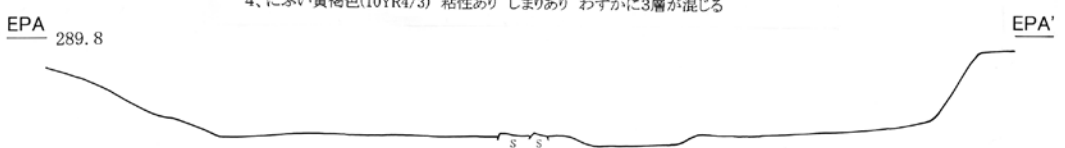
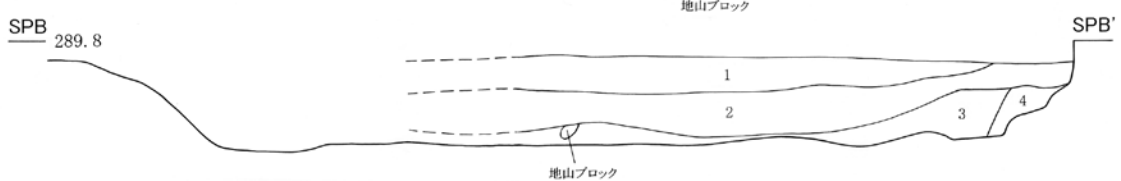
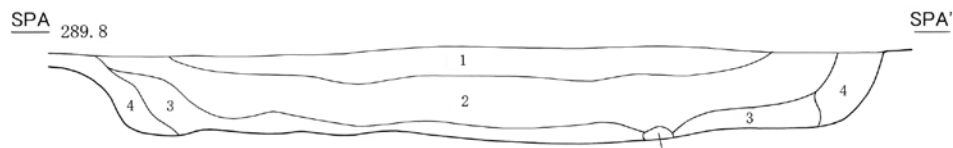
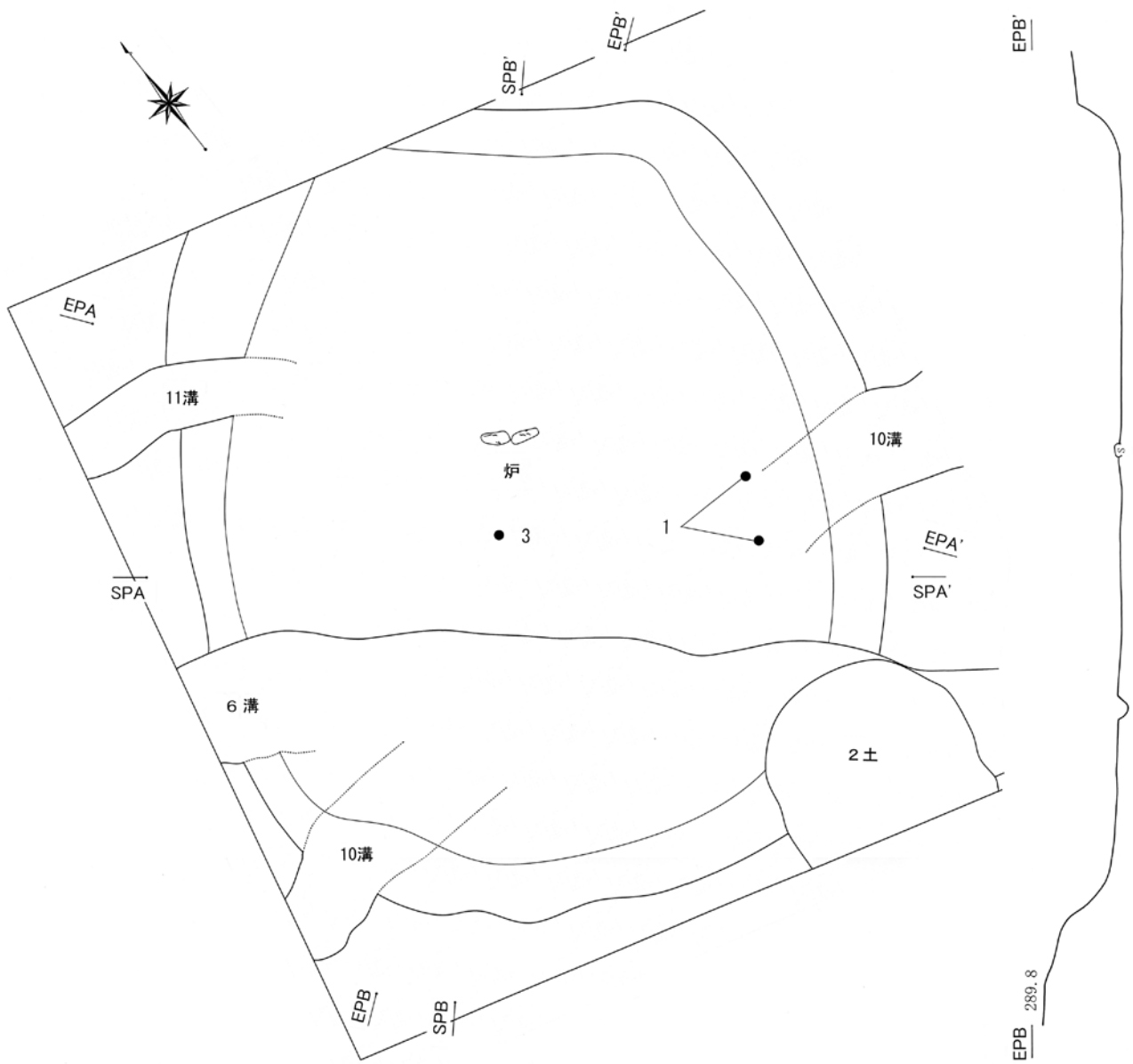
事が多く、そのこともあって市内で最も発掘調査件数の多い地域である。調査成果は年々蓄積されて行き、御岳田遺跡の発掘調査も、今次調査で7度目を迎えることとなった。この数字が多いか少ないかは別として、近隣の金の尾遺跡は9度、松ノ尾遺跡は15度、末法遺跡は6度行われており、それ以外の旧敷島町域の遺跡（村続遺跡1度、石原田遺跡1度など）と比べると、この地域がいかに発掘調査の多い地域であることがわかるであろう。これらの調査の結果、金の尾遺跡、松ノ尾遺跡では弥生・古墳・平安の各時代の集落跡が確認されており、旧敷島町南部地域では、弥生時代から断続的に集落が営まれていることが明らかとなっている。今次調査の結果、御岳田遺跡でも弥生時代後期の集落が発見されたことにより、旧敷島町南部地域では、弥生時代後期から開発の手が入っていたことを裏付ける結果となった。また、冒頭でも述べたが、西側微高地上では弥生時代後期から集落が営まれていたことが明らかになった。しかし、金の尾遺跡と本遺跡の出土土器は若干の時期差がある。したがって、今次調査の結果は新たな成果を得られた一方で課題も生じた。金の尾遺跡の土器様式（5A期）と本遺跡で出土した土器様式（5B期、6A期）を使用した人々は、金の尾遺跡に住んだ人々と繋がりがいいのか。集落の範囲はどのあたりまで広がるのか等である。それらの課題は、調査成果が蓄積されるにつれて、少しずつながらも確実に明らかになることを期待したい。

御岳田遺跡第1次から第7次までの調査成果

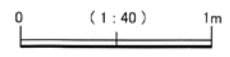
[住居跡] 2世紀後半～3世紀初頭	2軒	[周溝墓] 4世紀初頭	1基
4世紀中頃から	8軒		
5世紀中頃	1軒		
9世紀後半～10世紀前半	14軒		
10世紀中頃～後期	1軒		
11世紀初頭	2軒		
11世紀後半	6軒		
12世紀初頭	2軒		
時代不詳	6軒		

【引用・参考文献】

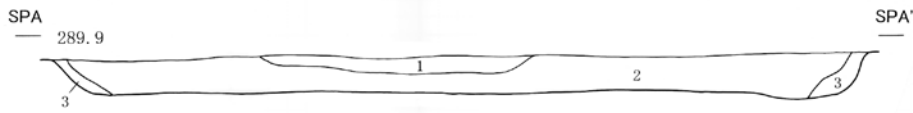
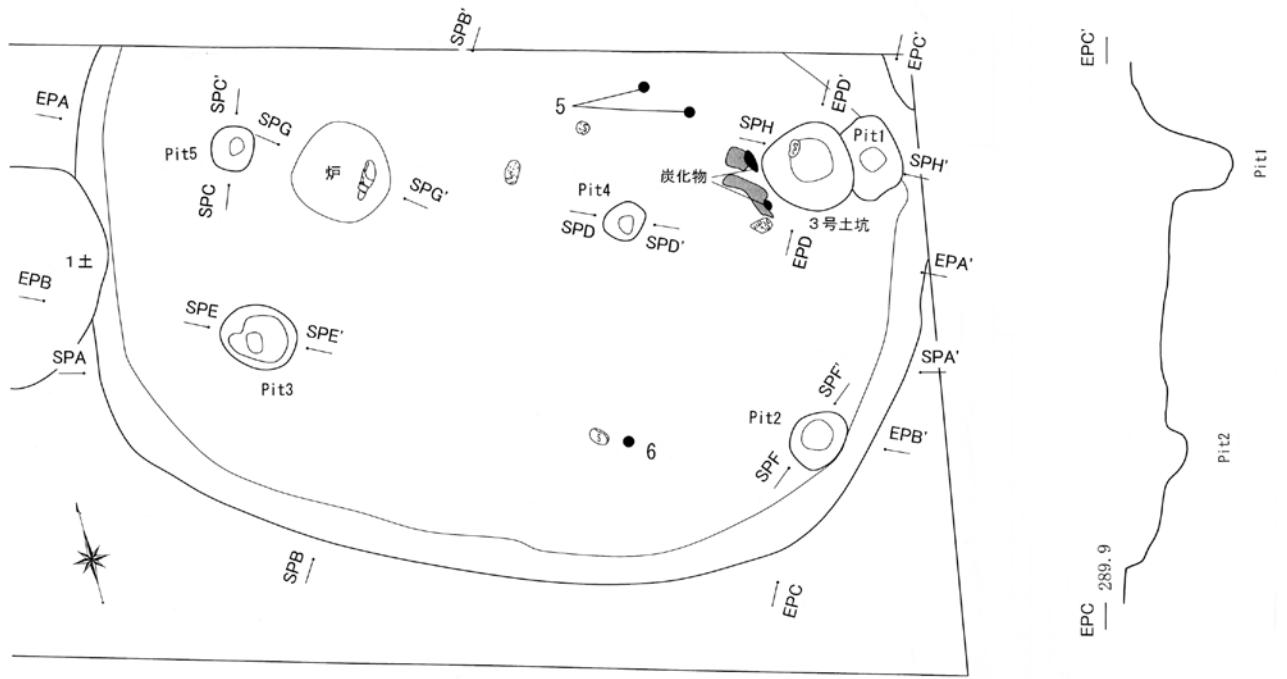
- 甲西町教育委員会ほか 1981 『住吉遺跡』
 櫛形町教育委員会ほか 1985 『六科丘遺跡』
 山梨県教育委員会ほか 1987 『金の尾遺跡 無名墳(きつね塚)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第25集
 山梨県教育委員会 1991 『上の平遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第59集
 山梨県 1997 『山梨県史 資料編2 原始・古代2』
 敷島町教育委員会 1999 『御岳田遺跡』敷島町文化財調査報告書 第8集
 敷島町教育委員会 2004 『御岳田遺跡Ⅱ』敷島町文化財調査報告書 第22集
 甲斐市教育委員会 2007 『御岳田遺跡Ⅳ』甲斐市文化財調査報告書 第11集
 甲府市教育委員会ほか 2008 『山梨学院川田運動場遺跡群(桜井畑遺跡・亀田遺跡・川田久保田遺跡)』甲府市文化財調査報告37
 甲斐市教育委員会 2013 『御岳田遺跡Ⅴ』甲斐市文化財調査報告書 第21集
 甲斐市教育委員会 2014 『御岳田遺跡Ⅵ』甲斐市文化財調査報告書 第22集



- 1、黒褐色(10YR2/3) 粘性あり しまりあり 1mm大の白色粒子を含む
- 2、黒色(10YR2/1) 粘性あり しまりあり
- 3、暗褐色(10YR3/3) 粘性あり しまりあり にぶい黄褐色土塊(10YR4/3)を含む
- 4、にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性あり しまりあり わずかに3層が混じる



第6図 1号住居跡

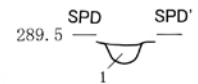


- 1、暗褐色(10YR3/3) 粘性あり しまり強い
- 2、黒褐色(10YR2/3) 粘性あり しまり強い、1mm大の白色粒子を含む、1mm大の小礫を含む
- 3、2層ににぶい黄褐色土(10YR4/3)が混じる層 粘性あり しまり強い



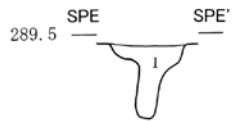
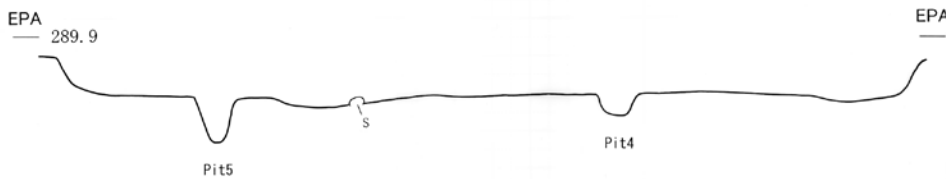
Pit5

1、黒褐色(10YR2/2) 粘性あり しまりやや弱い



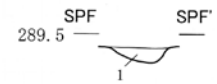
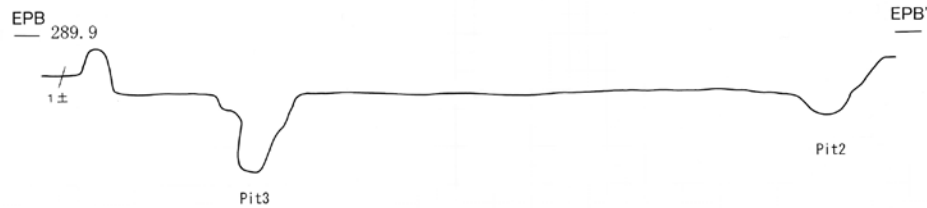
Pit4

1、黒褐色(10YR2/2) 粘性あり しまりやや弱い



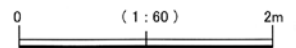
Pit3

1、黒褐色(10YR2/2) 粘性あり しまりあり

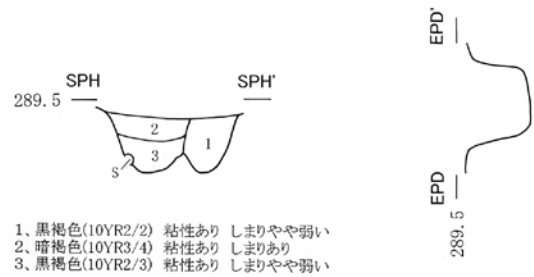
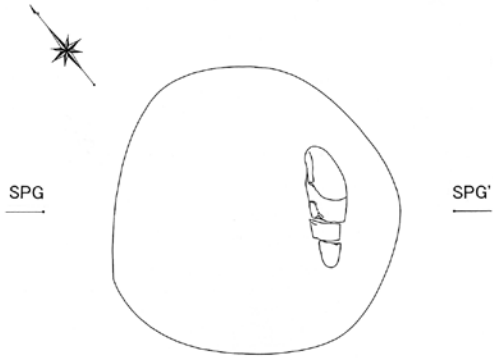


Pit2

1、黒褐色(10YR2/3) 粘性あり しまりあり



第7図 2号住居跡 Pit2~5

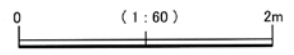


- 1、黒褐色(10YR2/2) 粘性あり しまりやや弱い
- 2、暗褐色(10YR3/4) 粘性あり しまりあり
- 3、黒褐色(10YR2/3) 粘性あり しまりやや弱い

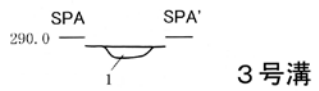
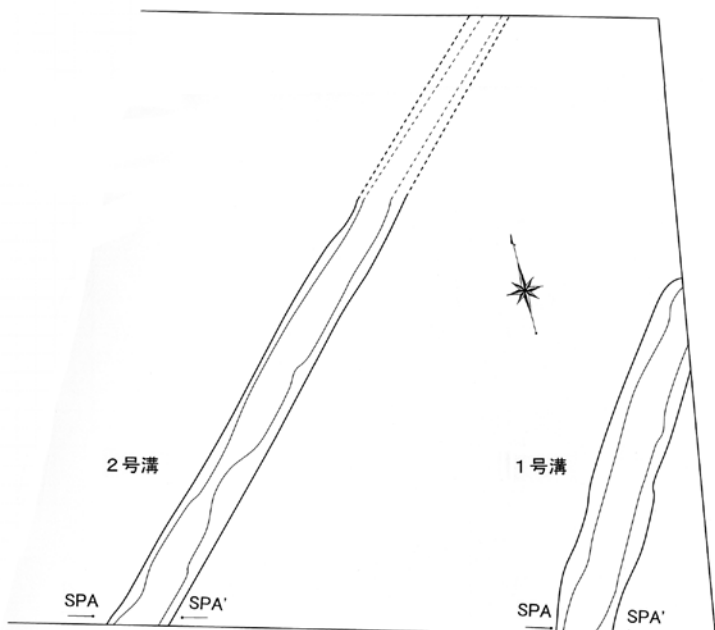
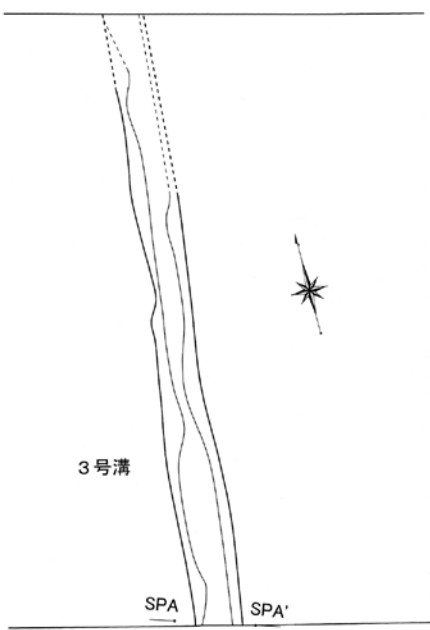
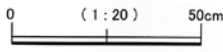
3号土坑・Pit1



2号住居跡炉

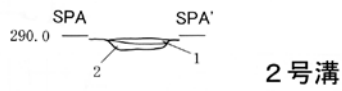


- 1、黒褐色(10YR2/3) 粘性あり しまりやや弱い



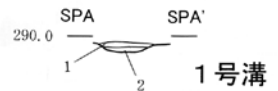
3号溝

- 1、にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性ややあり しまりあり 細粒砂



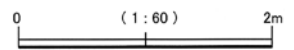
2号溝

- 1、にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性ややあり しまりあり 細粒砂
- 2、暗褐色(10YR3/4) 粘性強い しまり強い 細粒砂

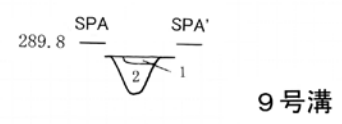
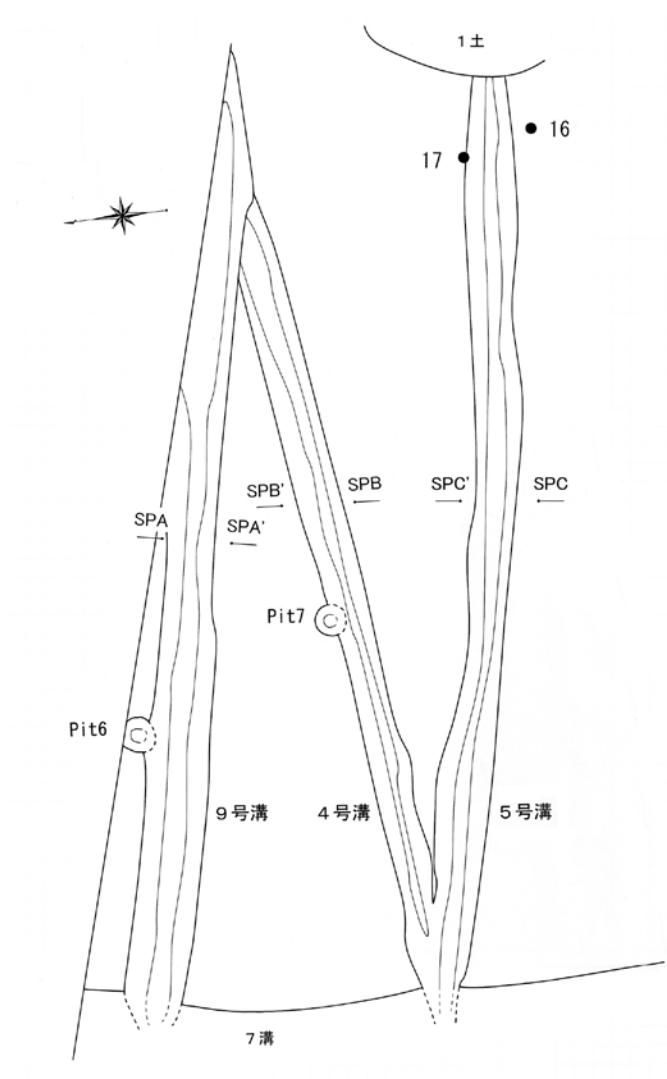


1号溝

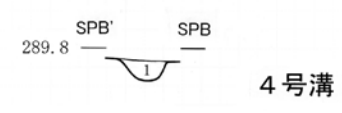
- 1、にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性ややあり しまりあり 細粒砂
- 2、暗褐色(10YR3/4) 粘性強い しまり強い 細粒砂



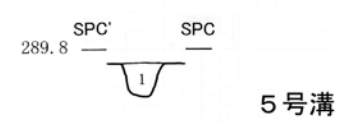
第8図 2号住居跡炉 3号土坑・Pit1 1～3号溝



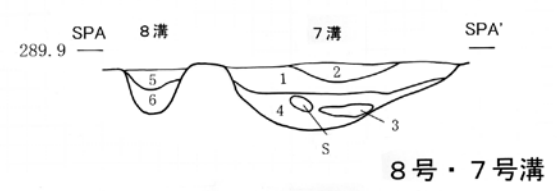
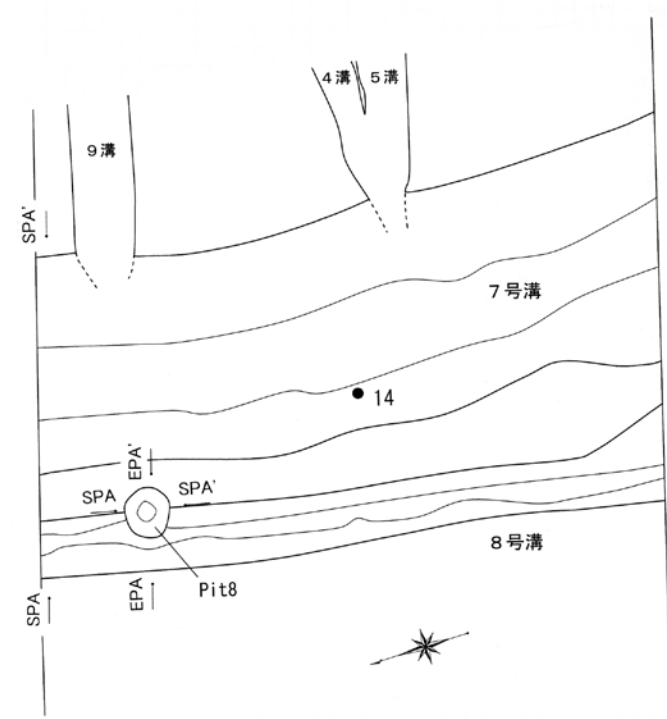
- 1、黒褐色(10YR3/2) 粘性あり しまりあり
- 2、黒褐色(10YR2/2) 粘性あり しまりあり



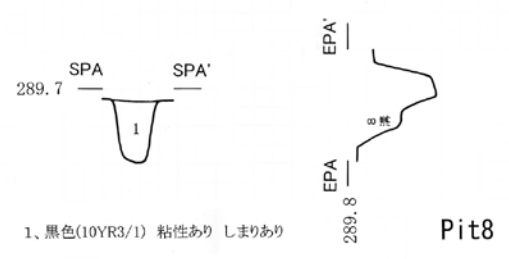
- 1、黒褐色(10YR2/3) 粘性あり しまりあり



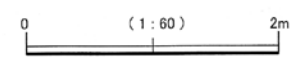
- 1、黒褐色(10YR2/3) 粘性あり しまりあり



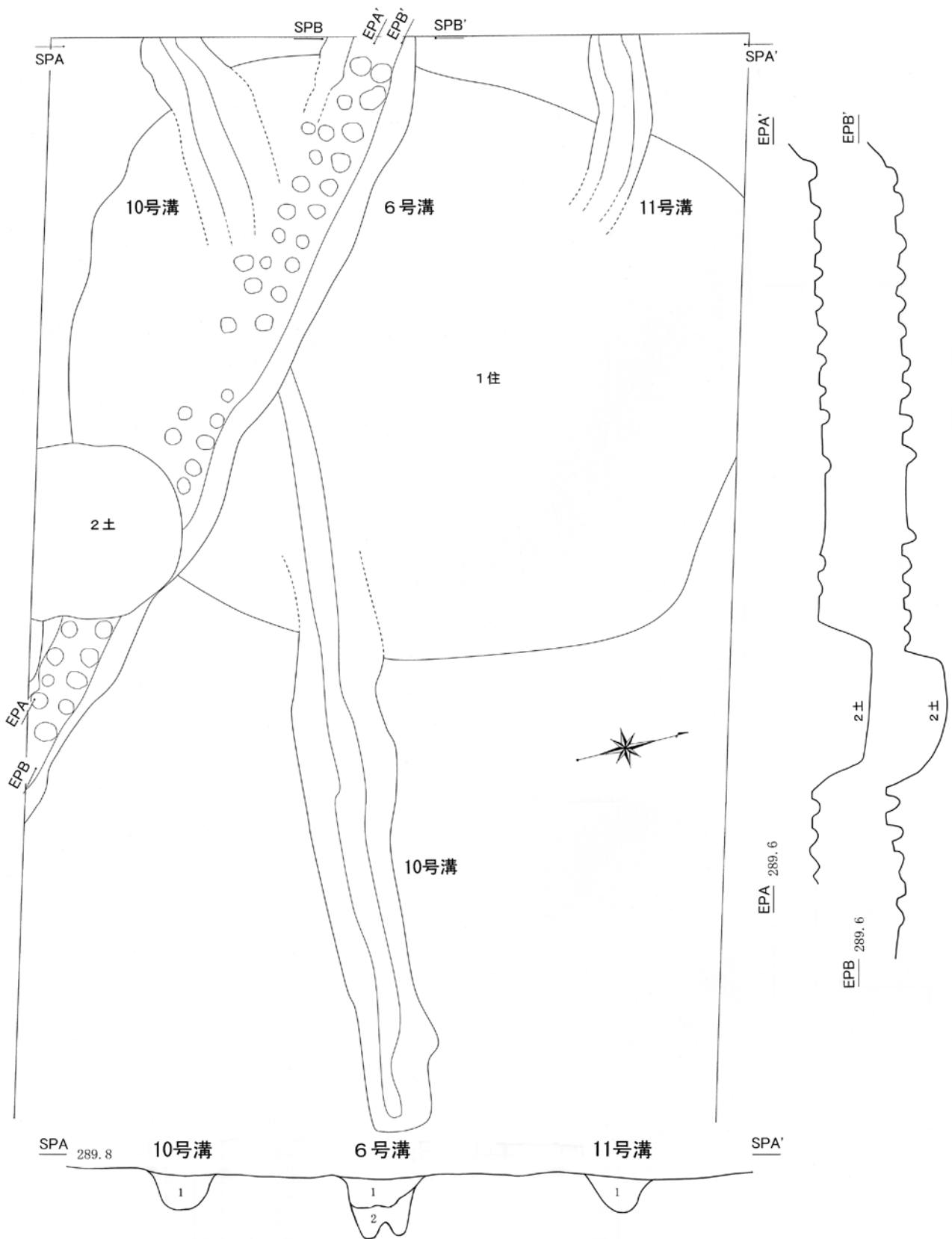
- 1、黒褐色(10YR2/2) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を多量に含む
- 2、黒褐色(10YR3/1) 粘性あり しまりあり
- 3、黒褐色(10YR2/2) 粘性強い しまり強い 粘土
- 4、黒褐色(10YR2/2) 粘性あり しまり強い
- 5、黒褐色(10YR2/2) 粘性あり しまり強い 1mm大の白色粒子を多量に含む
- 6、暗褐色(10YR3/3) 粘性あり しまりあり 1mm大の白色粒子を微量に含む



- 1、黒色(10YR3/1) 粘性あり しまりあり

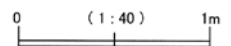


第9図 4・5・7～9号溝 Pit8

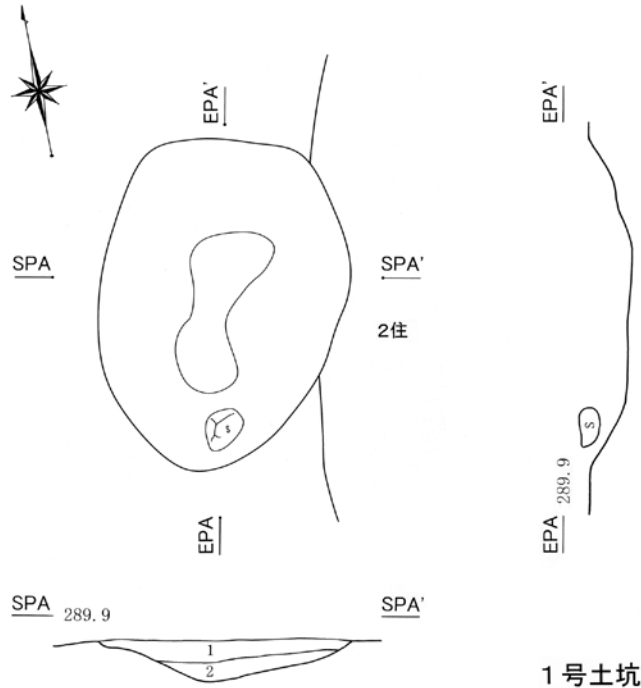


1、暗褐色(10YR2/3) 粘性強い しまり強い
1mm大の白色粒子を含む

2、黒褐色(10YR2/2) 粘性あり しまり強い

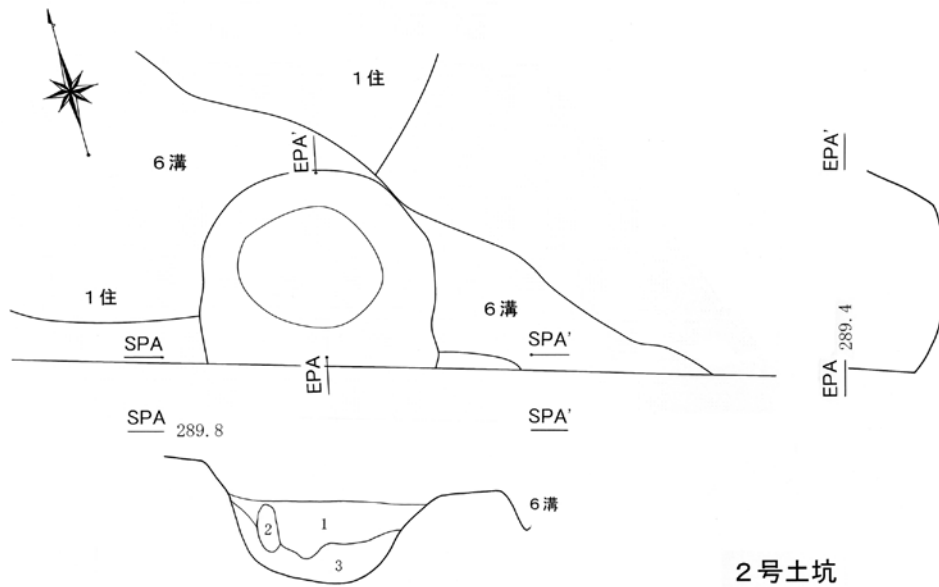


第10図 6号溝 10~11号溝



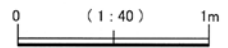
1号土坑

- 1、黒褐色(2.5YR3/2) 粘性強い しまり強い
- 2、黒褐色(10YR3/2) 粘性あり しまり強い、1mm大の白色粒子を少量含む

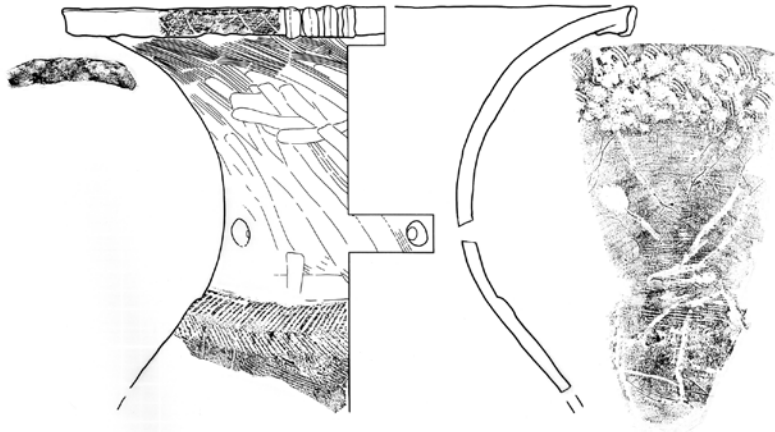


2号土坑

- 1、黒褐色(10YR2/3) 粘性あり しまり強い
- 2、褐色(10YR4/4) 粘性あり しまり強い
- 3、にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性あり しまりあり 雲母を多量に含み砂質 黒褐色土(10YR2/3)を少量含む

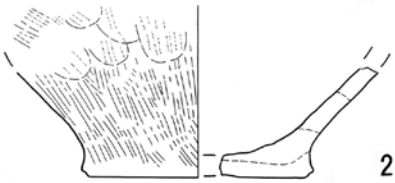


第11図 1～2号土坑

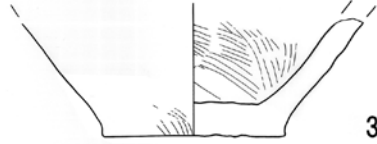


1

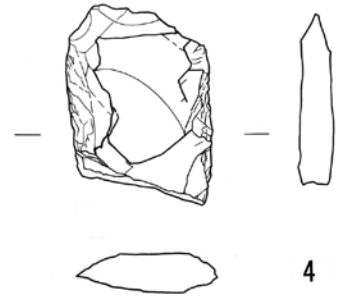
0 (1:4) 10cm



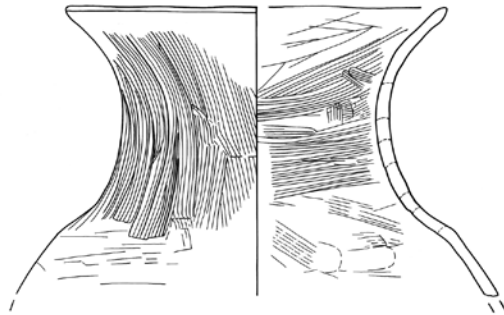
2



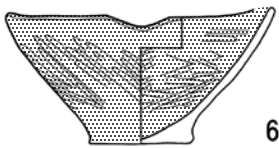
3



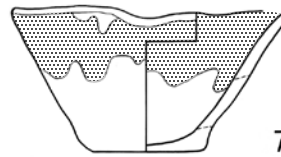
4



5



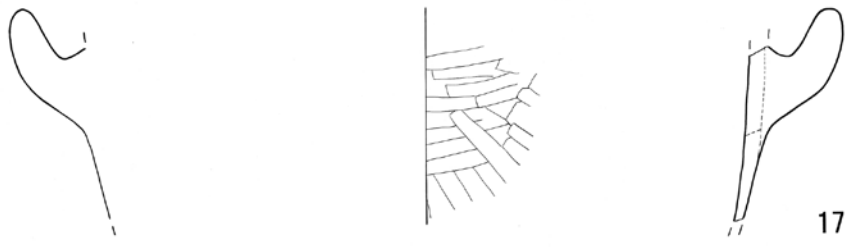
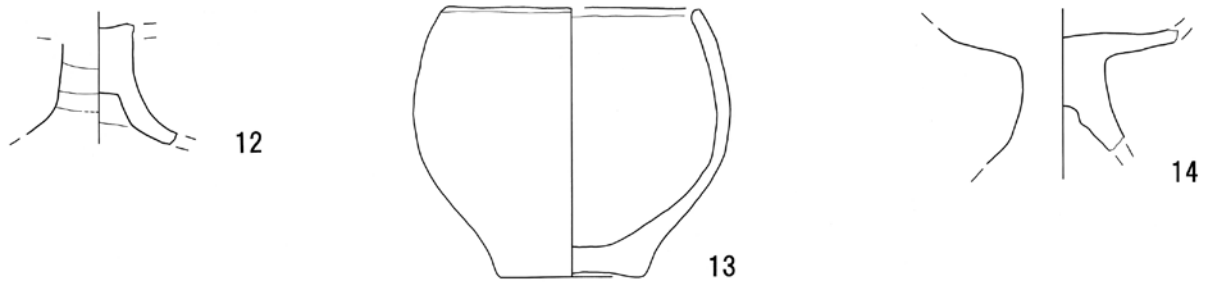
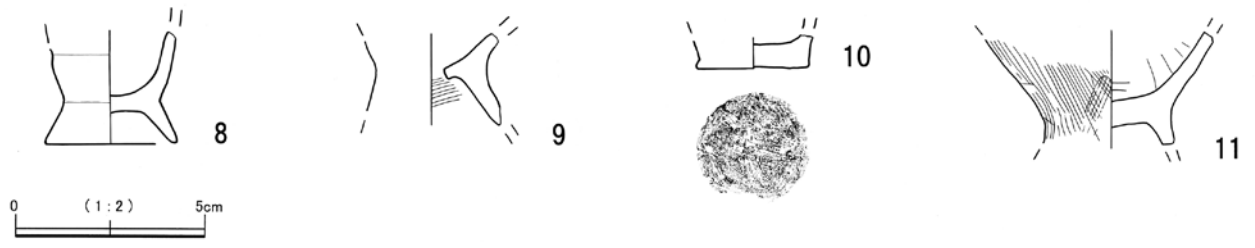
6



7

0 (1:3) 10cm

第12図 出土遺物 1



第13図 出土遺物2

第1表 出土遺物観察表

番号	注記番号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	E7-1住 P5・P6	弥生土器	壺	残20.5	(30.0)	—	橙 (7.5YR7/6)	キメやや粗い、石英・雲母を含む	良好	折り返し口縁、頸部穿孔／外面口縁部斜位格子状沈線→折り返し部に指頭痕→浮文貼付、頸部斜位ハケ目→斜位ナデ、肩部櫛状工具による疑似羽状縄文あり／内面口辺部半円状文→敲打痕、頸部横位ハケ目→ナデ
2	E7-1住検出面	弥生土器	壺 or 甕	残6.8	—	(9.2)	橙 (5YR6/6)	キメやや粗い、白色粒子を多量に含み、長石・雲母を含む	やや悪	外面斜位ハケ目、指頭痕あり／内面輪積み痕明瞭
3	E7-1住 P12	弥生土器	壺 or 甕	残4.5	—	(7.2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	キメやや粗い、長石・石英・赤色粒子・雲母を含む	良好	外面底部わずかにハケ目(→篋ナデ?)／内面斜位ハケ目
4	E7-1住上層	石製品	打製石斧	最大長 6.9	最大幅 5.6	最大厚 1.6	—	—	—	—
5	E7-2住 P10 E7-2住 P13	弥生土器	壺	残11.5	(15.0)	—	橙 (5YR6/6)	長石・石英・金雲母・小礫を含む	良好	外面頸部縦位ハケ目→肩部横ナデ、口唇部に横位ハケ目調整痕わずかにあり／内面横位ハケ目→ナデ
6	E7-2住 P11	弥生土器	片口付鉢	5.9	10.4	4.1	明赤褐 (2.5YR5/6)	キメ細かく緻密、長石・雲母を含む	良好	内外面赤彩明瞭／外面斜位ミガキ／内面横位ミガキ
7	E7-3土(2住)	弥生土器	片口付鉢	5.8	10.6	4.4	赤 (7.5YR4/6)	キメ粗い、長石・雲母・赤色粒子を含む	良	内外面赤彩／内外面ともに摩耗により、調整痕不明
8	E7-3土一括	弥生土器 (土師器)	ミニチュア土器	残3.0	—	—	にぶい褐 (7.5YR5/3)	キメ粗い、雲母・白色粒子・赤色粒子を含む	良好	—
9	E7-2住北サブ	弥生土器	台付甕	残3.6	—	—	橙 (5YR6/6)	キメやや粗い、雲母・赤色粒子・小礫を含む	良	外面部分的に赤彩あるも殆ど摩耗／内面脚部わずかにハケ目あり、底部に5mm四方の孔あり
10	E7-2住上層	土師器	壺 or 甕	残1.3	—	—	にぶい黄橙 (10YR5/3)	キメやや粗い、長石・雲母・白色粒子を含む	良好	底部ヘラ調整
11	E7-2住 Pt1	弥生土器 (土師器)	台付甕	残4.5	—	—	褐 (7.5YR4/3)	長石を含む	良好	外面縦斜位ハケ目／内面わずかにナデ、脚部内面にかすかに横位ハケ目あり
12	E7-3ミゾ一括	土師器	高坏	残4.8	—	—	明褐 (7.5YR5/6)	長石を含み、赤色粒子を微量に含む	良好	全体的にやや摩耗
13	E7-6ミゾ一括 E7-2土一括	土師器	鉢	10.75	(10.0)	(5.6)	橙 (7.5YR6/6)	キメやや粗い、赤色粒子を多量に含む	良好	内外面摩耗のため不明
14	E7-7ミゾ P1	土師器	高坏	残5.4	—	—	橙 (5YR6/8)	キメやや粗い、赤色粒子を多量に含み、極粗粒砂を含む	良好	全体的に摩耗
15	E7-5層一括	土師器	小型手捏ね土器	3.9	(5.1)	3.0	明黄褐 (10YR6/6)	キメ粗い、石英・雲母・白色粒子を含む	やや悪	—
16	E7-6層一括	土師器	小型手捏ね土器	5.5	(8.5)	(4.4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	長石・石英・雲母・赤色粒子・小礫を含む	良	内外面口縁部に指頭痕あり
17	E7-6層外 P2	土師器	甗	残11.4	—	—	橙 (7.5YR6/6)	石英・雲母・白色粒子を含む	良	内面縦斜位ナデ

第2表 土坑観察表

遺構名	規模 (cm)			平面形状	備考
	長径	短径	最大深度		
1号土坑	175	125	22	楕円形	2号住居跡、5号溝を切る
2号土坑	124	104	43	円形か	1号住居跡、6号溝を切る
3号土坑	73	67	45	隅丸方形	Pit1を切る、中層から7、下層から8出土

第3表 ピット観察表

遺構名	規模 (cm)			備考
	長径	短径	深さ	
Pit1	56	(45)	48	2号住居跡柱穴、上層から第13図-11出土
Pit2	48	40	12	2号住居跡柱穴
Pit3	60	49	60	2号住居跡柱穴
Pit4	35	29	15	
Pit5	35	33	31	
Pit6	27	(25)	—	9号溝を切る
Pit7	25	(24)	—	4号溝を切る
Pit8	40	32	27	8号溝を切る

写真図版





調査前風景（東から）



調査区全景（西から）



調査区全景（西から）



調査区西側
調査風景



調査区東側
調査風景



1号住居跡 完掘（南から）



1号住居跡 完掘（東から）



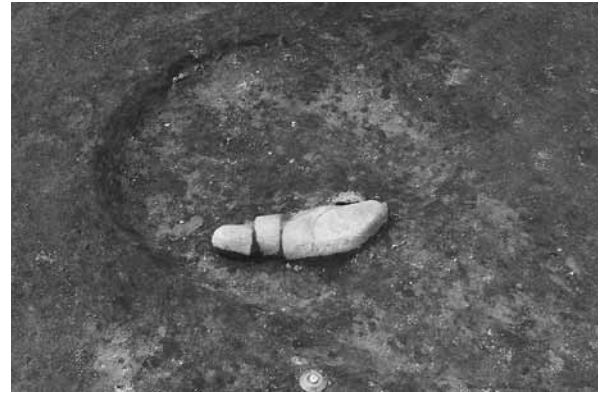
2号住居跡（南から）



2号住居跡 完掘（東から）



2号住居跡炉 検出状況（東から）



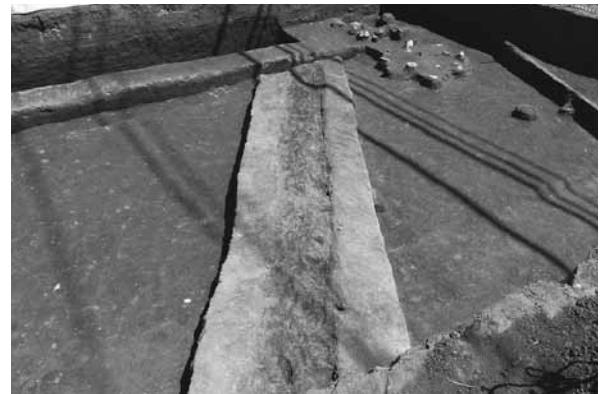
2号住居跡炉 完掘（東から）



2号住居跡 遺物出土状況（北から）



1号溝 完掘（南から）



2号溝 完掘（南から）



3号溝 完掘（南から）



9・4・5号溝 完掘（西から）



7号溝 完掘（南から）



8号溝 完掘（南から）



6号溝 ピット群検出状況（南から）



6号溝 ピット群検出状況（東から）



6号溝 ピット断面図（調査区西壁）



(西から)



(東から)

6号溝 完掘



1号土坑 完掘 (北から)



2号土坑 完掘 (東から)

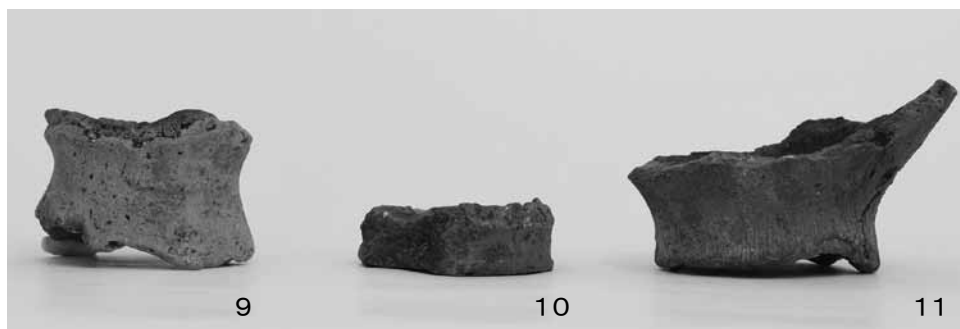


3号土坑 (2号住居跡内) 完掘 (南から)



3号土坑 (2号住居跡内) 遺物出土状況 (南から)





報 告 書 抄 録

ふりがな	みたけだいせき							
書名	御岳田遺跡 7							
副書名	宅地造成工事に伴う弥生・古墳時代の発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	甲斐市文化財調査報告書							
シリーズ番号	26							
編著者名	長谷川 哲也							
編集機関	甲斐市教育委員会							
所在地	〒400-0192 山梨県甲斐市篠原2610							
発行年月日	平成29年〔西暦2017年〕3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
みたけだいせき 御岳田遺跡	山梨県 甲斐市 大下条地内	19210	敷-6	35度40分 35秒	138度31分 18秒	平成24年 6月25日 ～ 平成24年 12月14日	109.56㎡	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御岳田遺跡	集落跡	弥生・古墳	住居跡 溝跡 土坑	弥生土器 土師器	本遺跡で初めて弥生時代後期の住居跡 2 軒を確認した。 溝の底部に杭列状のピット群を確認した。			

甲斐市文化財調査報告 第26集

御 岳 田 遺 跡 7

発行日 平成29年(2017)3月31日

発行 甲斐市教育委員会

山梨県甲斐市篠原2610

TEL (055) 278-1697

印刷 山梨県甲府市丸の内1-10-1

株式会社 峡南堂印刷所